論文題目「中原中也　詩の方法と批評の研究」

吉田恵理

【目次】

第Ⅰ部　詩の《フォルム》を読むための視角――呼吸・時間・翻訳

序

第一章　批評としての《小児》と方法としてのパロディ

第二章　「急ぎ過ぎた」ランボーと少年の時間――二つの「少年時」

第三章　盲目の時間――未発表〈蛙〉詩群と「蛙声」

第四章　散文のなかの非散文的なもの――富永太郎「鳥獣剝製所　一報告書」論

第五章　翻訳する身体、Honte と恥のあいだ――富永太郎「無題　京都」を中心に

第Ⅱ部　詩はいかにして死を書くか

第六章　〈嗤い〉と〈誠実〉の詩学――中原中也の〈ユーモア〉について

第七章　「秋岸清涼居士」の〈道化調〉――中原中也と〈宮沢賢治〉

第八章　骨を見る霊魂――「骨」論

第九章　〈神経衰弱家〉と詩の言葉の生成過程――「千葉寺雑記」の詩篇を読む

補論　　屍と詩――辺見庸「眼の海――わたしの死者たちに」

結語に代えて

初出一覧

参考文献一覧

【論文の要約】

本論文の目的は、詩の主題やモティーフではなく、小説とは異なった意味作用を齎す様態としての詩の《フォルム》や叙法をどのように読むことができるのかを問い、詩の表現の批評性について考究することである。中原中也（1907～1937）はさまざまな詩形を試みた詩人であり、批評的言説においては《フォルム》や「型」についての理念が育つ必要があると主張しもした。だが、たとえば小林秀雄による「彼の詩は、彼の生活に密着してゐた」（「中原中也の思ひ出」1949）といった評言や、大岡信らによる「うたびと」（「うたびととしての中也―近代詩の遺産―」1977）という見方、つまり中原中也の詩には形式への苦心の痕跡が見られず、「自然」に「内面」を吐露することがそのまま詩になり得た稀有な詩人であったというような見方が、かなり長い間支配的であったと言える。むろん近年の中原中也研究はこれに留まるものではなく、同時代の文学場や芸術思潮の参照によって詩人の営為を文学史上に再配置する研究が主流となっている。しかし、「内面」性に帰着する近代詩あるいは近代の抒情詩に対する批評の基準そのものを相対化し得るような批評は、詩を読むとはどういうことかという原理的な問いに向き合って一篇の読解の可能性を拓く試みの積み重ねから生まれるのではないだろうか。本論文は、中原中也の詩と批評的言説を同時に扱ってそれらの新たな関係を探りながら、テクストを内在的に読み直す方法を採る。本研究は中原中也の詩の方法を複数の可能性として浮かび上がらせるとともに、詩というジャンルの分析・読解の方法を探究するための予備的考察として位置づけられると考えている。またこうした目的から、中原中也と関わりの深い同時代の富永太郎や現代の辺見庸の方法について論及した章を中原中也と並べる形で組み入れた。

第Ⅰ部は、詩の《フォルム》を読むためにどのような視角があり得るかを考察している。本論文で使用する《フォルム》については序章で定義しているが、「流れ」「持続ぶり」「終始ぶり」と言い換えられるもの、流動や持続の状態や変転があるテクストの動態のことである。**第一章**は、中原中也の批評的言説に初期から登場する《小児》、それと微妙に差異化される〈子供〉の語彙との関係の論理を追跡した。ベルクソン由来の「純粋持続」とともに登場する「小児の感動の立場で行為する」（1927）という宣言は、前近代的な〈プリミティヴ〉への回帰志向（権田浩美）を示しているというだけでは説明が不十分である。この宣言は、言語が本来的に言語化しようとしている何事かに対して常に非同時的なものであり、「書く」ことにおいて「純粋持続」状態はひとまず終結させて思い出すことしか出来ないという認識の上にあるからだ。《小児》とは、〈子供〉という無意識的、他力志向的な創作理念（「詩心」）を裡に含む発想でありつつ、同時に「子供のやうに息を吸ひ、大人のやうに息を吐く」という二極を往還する方法意識、あるいは「希望と嘆息の間を上下する」力能の謂である。これを北原白秋の「童心」の最初の発露とされる『思ひ出』（1911）をパロディ化する詩篇「雪の宵」（1930）と接続する。白秋の「美意識」を中也の「内面性」や「主観性」が押し退けるという先行論の見方を『思ひ出』全体のコンテクストと方法的観点から批判し、白秋の「童心」が戦時下の「少国民」を用意する概念でもあったという歴史的文脈を踏まえて、中也の《小児》の方法が一篇においては規範的な感傷や郷愁を転倒させるようにプレテクストを解体・再構成するパロディの批評的侵犯となっていることを論証した。**第二章**は、「小児の感動の立場で行為する」という宣言が書かれた 1927 年前後の「少年時」二篇を、詩のなかの時間性をどのように解釈できるかという観点から考察した。考察に際して二篇と同時期に書かれたアルチュール・ランボーについての未発表評論「小詩論」（1927）を取り上げ、小林秀雄の「人生斫断家アルチュル・ランボオ」（1926）と共有していた「急ぎ過ぎた」ランボーの表象を確認しつつ、小林のランボー論と異なる文脈を明らかにした。「性急な絶対糾問者」ランボーの「出現と消失」そのものが芸術を破壊する「無頼の芸術」であったと小

林が語ったのに対し、中也はランボーはその表現においても「急ぎ過ぎた」、「叙事芸術」であると批判し、自らの詩観によってランボーとの方法的訣別を宣言している。これを踏まえて二篇の「少年時」を分析するとき、重要視したのはたとえば二行聯から三行聯への変化や一人称詞の登場回数の過剰さによってフレームレートの差が生ずるといった《フォルム》と詩のなかの時間性との関わりである。「少年時」は、詩人の過去を指すのでも、「孤独」や「喪失感」が主題であるといったことでもなく、テクスト内の時間的過程の観点から二篇の方法的な差異を読むことができるのだと結論づけた。**第三章**は、未発表評論「芸術論覚え書」（1934）と、第二詩集『在りし日の歌』（1938）の掉尾を飾る「蛙声」に未発表詩四篇を加えた〈蛙〉詩群の分析をもって、「盲目」の詩法と呼ぶべき方法論について論述した。論証のはじめに掲げた「盲目の秋」（1930）は、被限定的な一人称主格「私」の世界の触知の仕方を示し、俯瞰的でなくその視野に徹底して留まる「盲目」の季節＝時間においてこそ「私」の盲点としての〈女〉が詩に露出してくるというプロセスをもつ。「芸術論覚え書」は「名辞以前」のタームで知られる詩論／芸術論であるが、本論が注目したのは「樵夫山を見ず」の「樵夫」（＝芸術家）の時間の豊富性をいう箇所であり、そうした時間が創作の現場のみならず詩のなかで実現されるとすれば、問いを問う「盲目」の時間が詩の中でどのような叙法を以て引き延ばされつつ表現されているかを読む必要があるのではないかと問題提起し、〈蛙〉詩群を競合や矛盾を含めてさまざまな叙法を試みる作業の全体として分析した。**第四章**は、富永太郎の代表作とも言える散文（詩）「鳥獣剝製所　一報告書」（1925）を細部に亘って読解し、詩と散文というジャンル的な対立では摑むことの出来ない、富永の〈歌う〉ことと〈語る〉こととの葛藤を孕んだ方法意識を探った。同作は脱自的な瞬間を「報告」しようとする〈語り〉の中に、意味の奥行を失ったフランソワ・ヴィヨンの〈歌〉が翻訳体でもって引用されて横すべりに落ちていく、あるいは擬音語に変化していくという《詩形（フォルム）》を問題化することができる。それによって、一篇は〈自意識〉の問題系に終始するものではなく、「この世界の縁辺」としての〈皮膚〉や〈表面〉から立ち上がってくる境界的な言葉を志向しているのだということ、さらに富永の創作を 1920 年代の詩と散文のジャンル的境界の過渡的な状況における、「非散文的なもの」（萩原朔太郎「自由詩の矛盾観念」1926）を追究する実践のヴァリエーションの一つとして捉え直すことが出来るのだと論じた。**第五章**は、［恥の歌外三篇］（1925）として『山繭』に同時掲載された富永太郎の四篇の詩の分析を行い、特に四番目に配置された「無題　京都」に〈京都〉を彷徨する身体、および翻訳する身体が対象化されていることを論証した。前者の身体性の考察にあたっては、梶井基次郎の「檸檬」（1925）とその先行研究を補助線とし、一篇の構造分析を通して「檸檬」の「私」が自らに転移させることのできた「詩人」の身体をさらに対象化しているのが富永の詩篇なのだと位置づけた。さらに、初出形態が形成する「恥の歌」との連続性を踏まえると、翻訳言語を活用した押韻、漢語、構成によって、語る主体と語られる対象との安定した関係が撹乱され、翻訳する身体と翻訳のプロセスに抱え込まれる断層や言語の増殖が可視化されることを指摘できる。富永の物語行為ならぬ詩行為は翻訳行為と分かち難く結びついており、「無題　京都」は翻訳が遂行される状況そのものを構造化するテクストなのだと結論づけた。

中原中也の批評は概ね「近代」批判であると言ってよいのだが、そもそも《フォルム》を詩の批評性として読む必要はどこから生じるのか。**第Ⅱ部**は、このことを《死》と詩の関係から検討する。**第六章**は、富永太郎への追悼文（1926）に現れるボードレールの〈ユーモア〉を起点に、中原中也の晩年の詩篇「夏と悲運」（1938）と「春日狂想」（1937）の読解、および〈微笑〉や〈嗤い〉の表象をもつ中也のチェーホフ論について分析と考察を行った。そこで析出したのは、〈嗤い〉の超越的な審級を読者に暗示しながら同時にそうした審級が解決や解放を齎さないことを明示する、イロニーともカーニバル的な〈笑い〉とも異なる、詩のなかの「対他する」場に駆動する〈ユーモア〉の機能であ

る。特に、「述志」の系譜の到達点と目される「春日狂想」においては、愛するものを失ってメランコリーの状態に陥る「なほもながらふ者」の語り口や詩のリズムを契機とした〈ユーモア〉が、いかにして生／死に対する主体としての支配を回復しようとする〈倫理〉を批評対象としつつ《死》の他性と向かい合うかを論証した。**第七章**は、実弟の戒名を詩題に掲げる未発表詩篇「秋岸清涼居士」（1934）と、同時期に集中して書かれた〈宮沢賢治〉論との関連を考察した。「秋岸清涼居士」を含め、この時期に中也は〈道化調〉の詩篇を幾つも制作しているが、それらには〈宮沢賢治〉からの引用を複数確認できる。本章はまず、中也の賢治論を「全集」観と「作品」論とに分けて考察することで、〈宮沢賢治〉評価が急速に高まる賢治没後の同時代状況に対する中原中也の位置を問い直す。さらに、その「作品」論に見出される、言語芸術が原理的に抱える翻訳不可能性の問題が実作においてはどのような試みに展開したのかを問題化した。その一例として、「原体剣舞連」（1924）からの引用を有する「秋岸清涼居士」を精読し、特定の言表主体に還元不能な〈道化調〉の身振りと《死者》への名づけをめぐる詩の構造との関係について論じた。**第八章**は、中原中也の詩のなかでも人口に膾炙した一篇である「骨」（1934）について、先行研究の静的（スタティック）で対立図式的な見方を乗り越える解釈を以下の手順で試みた。まず「骨」には前章でも確認した〈道化調〉が見られるのだが、一篇はそれが消滅して〈僕〉という一人称が放逐され〈骨〉が主格として屹立するというプロセスをもっている。その展開を、いったん発した言葉を後から追いかけるように駆動する発話行為と発話位置の移動を含む詩の動態として読む方法を提示し、発話位置という観点から方法的差異の明らかな「盲目の秋」との比較を試みる。解釈を通じて得られた見解から、近代の抒情詩における超越的主体と《死》の表象の親和性をめぐる議論において、詩の中の人称と発話位置の移動が問題化されることを論じた。**第九章**は、中原中也の晩年における精神病院での療養生活中に書かれたノートと詩「道修山夜曲」「雨が降るぞえ――病棟挽歌」（1937）を分析・考察した。1936 年、幼い息子を亡くして神経衰弱が高じた中也は、翌年中村古峡療養所に入院していたが、この時治療の一環として義務づけられていた「療養日誌」と私的な雑記帳「千葉寺雑記」が残されている。本章で試みたのは、従来これらの資料と入院中の詩作が〈神経衰弱家〉から〈詩人〉への〝回復〟の物語を前提に捉えられてきたことを批判し、特に「千葉寺雑記」に書かれた二篇の詩を読み直すことである。「道修山夜曲」におけるセレナーデの叙法と「僕」のしゃがむ姿勢、「雨が降るぞえ」における病棟内の規律を刻印された〈神経衰弱家〉の身体性といった観点を提出し、詩と身体の強い結びつきが齎している詩の言葉の生成の劇を論じている。**補論**は、詩ジャンルにおける「震災後文学」の代表作とも云われる辺見庸『眼の海』（2011 但し扱ったのは初出形）の詩群がもつ東日本大震災後の詩表現の批評性を考察した。災厄のスペクタクルから隠蔽され、生（者）と死（者）の観念的な弁別を攪乱する〈屍体〉の哲理が、「単独者」の「犯意」をもって問題化されていることをまずは同時期の作品外の言説から確かめる。その上で取り上げた二篇の詩の分析によって明らかにしたのは、「モノ化」する〈屍体〉と「モノ化への抵抗」である言葉との抗争状態が積極的に惹き起こされ、〈屍体〉の存在の様式が「わたし」の現実認識の反証の可能性となることである。それはまた、「わたしの死者たち」を想像することなしに「わたし」という「単独者」の責任を思考することが可能かという問いを生起せしめるのだと結論づけた。本章は、第二部で考察してきた、詩がいかにして構造的に《他者の死／死の他性》を抱えるかという問題を現代詩において問いかけるための試論でもある。虚構／現実の二項対立では捉えられないような事態に対して詩表現がどのように迫るかという観点から見るとき、震災後の辺見の詩は、中原中也の詩法と同様に詩の形そのものが《死》を構造化し、言語に対する批評性となるのだと結論づけている。